

互いに尊重しよさを認め合おうとする児童を育成する学級活動の在り方 — 係活動を活性化する工夫を通して —

呉市立広小学校 脊戸 弘美

研究の要約

本研究は、係活動を活性化する工夫を通して、互いに尊重しよさを認め合おうとする児童を育成する学級活動の在り方について考察したものである。文献研究から、互いに尊重しよさを認め合うためには、活動を計画したり振り返ったりする過程で、友だちとかかわり合う機会を意図的・計画的に設定する必要があることを確認した。そこで、こうした機会をより多く設定するために、日常的な活動である係活動に着目し、小集団での活動や、一人一人が活躍する場を増やし、よさを見つけて伝え合う活動を位置付けることによって、互いに尊重しよさを認め合おうとする児童を育成することができると考え、組織づくりと運営の両面から、係活動を活性化する工夫を行った。その結果、活性化する工夫の中で、特に、係づくり、活動時間の確保、思いを伝えるカードの活用は、互いに尊重しよさを認め合おうとする態度を育てる上で効果的であることが分かった。

キーワード：活性化

I 研究の目的

中央教育審議会の答申（平成20年）において、自分に自信がもてず、人間関係に不安を感じていたり、好ましい人間関係を築けず社会性の育成が不十分であったりする状況が見られたりするという課題が指摘された。これを受け、特別活動では、よりよい人間関係を築く力が重視され、さらに学級活動では、互いに尊重しよさを認め合えるような望ましい人間関係を育成することが重視されている。

本県が今年度行った「基礎・基本」定着状況調査の生活と学習に関する調査によると「自分のよさは、まわりの人から認められている」という項目で、肯定的な回答をしている児童は58.9%であった。この傾向は毎年ほぼ同じである。これは、人から認められる機会が少なく、自分に自信がもてないこと、人間関係がうまく築けず、学級に居場所を感じることが少ないことが要因の一つであると考えられる。

そこで、本研究では係活動に焦点を絞り、小集団での協同的な活動ができるようになる低学年の段階に着目し、一人一人が役割をもって創意工夫しながら活動し、認め合う機会を設定していく等、係活動を活性化する工夫を通して、互いに尊重しよさを認め合おうとする児童を育成することを目的とする。

II 研究の基本的な考え方

1 互いに尊重しよさを認め合おうとする児童について

（1）互いに尊重しよさを認め合うとは

小学校学習指導要領（平成20年a）では学級活動の目標を「学級活動を通して、望ましい人間関係を形成し、集団の一員として学級や学校におけるよりよい生活づくりに参画し、諸問題を解決しようとする自主的、実践的な態度や健全な生活態度を育てる。」¹⁾としている。学級活動における「望ましい人間関係」について、小学校学習指導要領解説特別活動編（平成20年b、以下「解説」とする。）では「『望ましい人間関係』とは、楽しく豊かな学級生活づくりのために、互いに尊重しよさを認め合えるような人間関係」としており、「望ましい人間関係」を具現化したものが「互いに尊重しよさを認め合えるような人間関係」²⁾である。また「解説」では、「特に、低学年では『仲良く助け合おうとする人間関係』、中学年では『協力し合おうとする人間関係』、高学年では『信頼し支え合おうとする人間関係』の育成を重視する。」³⁾としており、発達段階に応じて望ましい人間関係の育成をしていくことが示されている。

長沼豊（2010）は、互いを認め合うことにおいて、「体験活動で気付いたことやその感想を述べ合うことで、児童生徒各々の考え方を知ることができ、相互理解が深まるのである。」⁴⁾と、伝え合うことの重

要性を述べている。

以上のことから、本研究では、「互いに尊重しよさを認め合う人間関係」とは、共に協力し、信頼し、支え合い、よさを伝え合い、自他のよさを認め合う関係と捉える。低学年の段階では、仲良く助け合いながら、中学年の段階では、共に協力しながら、高学年では信頼し支え合いながら、よさを伝え合い、互いのよさを認め合う関係を育成していくことにつながると考えられる。

(2) 互いに尊重しよさを認め合おうとする児童を育成するために

互いに尊重しよさを認め合う関係を築く体験及び子どもたちへの指導法として杉田（平成18年）は、次のように述べている。

- 集団内の人とのかかわりを多様に、意図的に、巧みに創り出す。
 - ・人とのかかわりは大切、友達は大切だと実感する場や雰囲気をつくる。
- より多くの子どもたちに活躍の場をつくる。
 - ・認められる機会を多様に設定する。
 - ・一人一人の居場所をつくる。
- 「活動のできばえ」を「協力の成果」として評価する。
 - ・互いのよさが生かされたことを実感させる。
- 人間関係上のトラブルを自分たちで解決する体験をさせる。
 - ・友達のよさや大切さに気付かせる。
- コンセンサスを得るような集団解決による話し合い活動の体験を重視する。
 - ・安易な多数決を避け、折り合いをつけることの大切さを理解させる。

また、肥沼志帆（平成24年）は「子どもたちが認め合えるようにしていくためには、役割を分担することや、相談をしてその責任を果たすことや、やつたことについて振り返って課題を明らかにすることなどについて、子どもたちが自主的に取り組めるようにしていくことが欠かせない。」⁵⁾と述べている。

これらのことから、互いに尊重しよさを認め合えるような児童の育成をしていくためには、その活動を振り返る過程で、友だちの大切さやよさを認め合う機会を意図的・計画的に設定していくことが必要であると考える。このような機会を増やすためには、日常的な活動に着目する必要がある。学級活動において最も日常的な活動と言えるのが係活動である。この係活動を活性化することにより、互いに尊重しよさを認め合おうとする児童を育成することができ

ると考える。

2 係活動を活性化するために

(1) 係活動を活性化するとは

係活動のねらいについて「解説」では、「学級の児童が学級内の仕事を分担処理するために、自分たちで話し合って係の組織をつくり、全員でいくつかの係に分かれて自主的に行う活動であり、児童の力で学級生活を豊かにする。」⁶⁾と示している。

また、係活動について占部美緒子（2011）は「子どもたちがみんなで話し合って決めた、こんな学級にしたいという学級目標を達成するためのものである」⁷⁾と述べ、係活動と学級目標とのつながりの大切さを挙げている。

これらのことから、係活動を活性化するとは、児童が学級目標達成のために、自分たちで話し合って組織をつくり、学級内の仕事を分担処理し、自主的に活動していくようになることであると考える。

(2) 係活動を活性化する工夫

係活動を活性化させるために、杉田（2012）は「『学級に目を向けさせること』から、『学級での生活に関心をもたせること』『学級での生活の向上のためにできそうなことを具体的に見つけること』『反省に基づいて活動の改善を図ること』までの一連の活動のプロセスについて、これまで以上に丁寧に指導する必要がある。特に、『魅力ある組織づくり』や『やる気が継続する係活動コーナー』などについて一層の工夫が求められる。」⁸⁾と述べている。

また、京都市総合教育センター（平成23年）では、係活動を活発にするために①時間の確保②役割の明確化③活動の計画づくり④発表の場の設定⑤評価の場の設定⑥子どものやる気 UP の六つの手立てを挙げている。

中尾佳子（2011）は、係活動を活性化させることについて「どんなに好きな仕事でも、途中で振り返り、成果を確かめたり、友だちに認められたり、また見直したりすることが大切なことがある。」さらに「ある程度の期間が過ぎたところで、自己評価や相互評価をすることが重要になってくる。そして『やればできる』『やって楽しかった』『クラスの役に立った』などの自己有用感や所属感を味わわせることで、さらに活動が活性化し、より楽しい学級へと近づくであろう。」⁹⁾と述べている。

北村文夫（2011）は、学級活動の内容について「発達段階に応じて、自分自身から出発して周囲の人と及んでいく内容の高まりを、活動の内容としている

表1 発達の段階に即した係活動を活性化するための工夫⁽¹⁾

	低学年	中学年	高学年
指導のめやす ⁽¹⁾	<ul style="list-style-type: none"> 当番的な活動から始め、少しずつ創意工夫できる係の活動を見付けられるようにする。 少人数で構成された係で仲良く助け合って活動し、学級生活を楽しくすることができるようとする。 	<ul style="list-style-type: none"> 様々な活動を整理統合して児童の創意工夫が生かせるような係活動として組織できるようにし、協力し合って楽しい学級生活がつくれるようにする。 朝や帰りの時間などを生かして、積極的に取り組めるようにする。 	<ul style="list-style-type: none"> 自分のよさを積極的に生かせる係に所属し、継続的に活動できるようにする。 高学年としてふさわしい創意工夫のできる活動に重点化するなどして、信頼し支え合って、楽しく豊かな学級や学校の生活をつくることができるようとする。
組織づくり	<p><u>目標の明確化</u></p> <ul style="list-style-type: none"> 学級目標達成に必要な活動であることを意識し、学級を楽しくすることができる係を設定する。 <p><u>係づくり</u></p> <ul style="list-style-type: none"> 活動のめあてを明確にする。・自分の好きなこと、得意なこと、持ち味を生かせる係を考える。・係名の工夫をする。 	<p><u>役割の明確化</u></p> <ul style="list-style-type: none"> 当番活動と係活動が混在していてよい。・一つの係に一人から始め、2, 3人へとしていく。多い場合は分ける。 当番活動と係活動をはっきり区別する。・3人から4人で編成する。 当番活動と係活動をはっきり区別する。・4人から6人で編成する。 	<p><u>役割の明確化</u></p> <ul style="list-style-type: none"> 一人一役とし、仕事を明確にする。
運営	<p><u>時間の確保</u></p> <ul style="list-style-type: none"> 学級活動、朝の会、帰りの会、休憩時間、給食時間、放課後等の時間を計画的に使う。 <p><u>活動計画</u></p> <ul style="list-style-type: none"> 活動計画書を作成し、掲示する。 いつ、誰が、何をどうするかを話し合って決め、全員が理解できるようにする。 	<p><u>時間の確保</u></p> <ul style="list-style-type: none"> 教師の支援を受けながら、活動計画書に従って、計画を立てる。週計画を立てる。 <p><u>活動計画</u></p> <ul style="list-style-type: none"> 週計画を立てる。 学期、月、週ごとに計画を立てる。 	<p><u>時間の確保</u></p> <ul style="list-style-type: none"> 話合いで決めた役割を共通理解する。 できるだけ多くの児童にリーダーの経験をさせる。
まとめ	<p><u>創意工夫</u></p> <ul style="list-style-type: none"> 教師の支援を受けながら、創意工夫のある活動をする。 <p><u>係コーナーの活用</u></p> <ul style="list-style-type: none"> 掲示板の活用 係グッズコーナーの設置 <p><u>発表の場</u></p> <ul style="list-style-type: none"> ポスター、新聞、作品等で発信する。 実演する。 係活動の報告や連絡をする。 集会活動に発表会を設定する。 <p><u>振返り</u></p> <p>個人での振返り (係ファイルの活用)</p> <p>毎週定期的に、振返りカードで自己評価をする。</p> <p>観点</p> <ul style="list-style-type: none"> 自分から進んで活動をしているか。 活動は学級のみんなのためになるようなものか。 友だちのよいところを見つけて伝えたか。 自分のよいところが見つかったか。 <p>活動グループでの振返り (係コーナーの活用)</p> <p>毎週定期的に、振返りカードで自己評価や他者評価をする。</p> <p>観点</p> <ul style="list-style-type: none"> 計画に沿った活動ができているか。 係内でがんばっていた友だち、創意工夫していた友だちはいないか。 「ありがとうカード」や「お願いカード」をもとに、活動の内容、方法を考え「返事カード」を書く。 <p>学級全員での振返り (係コーナーの活用)</p> <p>毎週定期的に、カードを全員が書き、各係や友だちに渡す。</p> <p>観点</p> <ul style="list-style-type: none"> 楽しかったことや、よかったです「ありがとうカード」に書く。 やって欲しい活動等を「お願いカード」に書く。 友だちのよいところを「よいところカード」に書く。 <p><u>カードの活用</u></p> <ul style="list-style-type: none"> カードに記入し、係コーナーに掲示する。 カードを係全員で読み、活動を振り返る。 カードをもとに工夫改善する内容を話し合い、活動に生かす。 カードをもとに活動内容を振り返り、よりよい活動になるように工夫し、活動計画を立てる。 見直した内容について係コーナー等を使って発信する。 <p><u>係活動の振返り</u></p> <p>個人での振返り (係ファイルの活用)</p> <p>係の再編時、振返りカードで自己評価をする。</p> <p>観点</p> <ul style="list-style-type: none"> 友だちのよいところを見つけて伝えたか。 自分のよいところが見つかったか。 <p>活動グループでの振返り (発表する)</p> <p>係の再編時、係活動振返りカードで相互評価をする。</p> <p>観点</p> <ul style="list-style-type: none"> 係活動の目標は達成できたか。 学級目標に近づくような活動だったか。 友だちのがんばっていたことや、よかったですなど。(係内と学級内で) 	<p><u>振返り</u></p>	

ことを十分に汲み取って考慮していくことが大切である。」¹⁰⁾ とし、発達段階に応じた指導が必要であることを述べている。

これらのことから、係活動を活性化していくためには、係活動の組織づくりと教室環境の係コーナーを含む運営の場面のそれそれで工夫が必要であり、組織づくりと運営の場面において、計画的・意図的に振返りの場を設定し、自己評価や相互評価、教師の評価等を行うことが必要である。また、これらは発達段階に応じて行わなければならないと考える。

以上、「解説」にある発達の段階に即した指導のめやす、杉田の組織づくりの段階における工夫、京都市総合教育センターの運営の段階における手立て、中尾の振返りの工夫、及び北村の発達段階に応じた指導の必要性から、係活動を活性化するための工夫を前頁表1に整理した。

このことで、児童が自主的に活動するようになるとともに、活動の過程でよさを認め合う機会を設定していくことで、互いに尊重し、よさを認め合おうとする児童の育成につながると考える。

III 研究の仮説及び検証の視点と方法

1 研究の仮説

係活動において、組織づくりの段階では、目標を明確にし、児童のよさを生かした係づくりを行い、運営の段階では、役割を常に意識させる小集団活動や、活動に対する思いを伝え合う場面を取り入れることにより、互いに尊重しよさを認め合おうとする児童を育成することができるであろう。

2 検証の視点と方法

研究授業等において、仮説を検証する。

【検証の視点】

- 学級目標達成のために自主的に活動したか。
- 仲良く助け合いながらよさを伝え合い、互いのよさを認め合う児童を育成できたか。

【検証の方法】

- 活動前・活動後の児童のアンケートの分析・考察（2段階評定法、自由記述）
- 振返りカードの記述の分析・考察
- 授業記録の分析・考察

IV 研究授業等について

1 研究授業等の計画

- 期間 平成25年1月7日～平成25年1月25日
- 対象 所属校第2学年（1学級32人）
- 活動名 クラスみんなが楽しい係活動をしよう
- 目標 創意工夫しながら活動計画を立て、仲よく助け合いながら係活動を行う。

表1をもとに表2の全体計画を作成した。

表2 全体計画

主な活動内容（○）と留意点（・）	
事前の活動	<ul style="list-style-type: none"> ○ 係づくりをする。 <ul style="list-style-type: none"> ・目標の明確化。 ・好きなこと、得意なことを生かせる係。 ・当番活動と係活動が混在していてもよい。 ○ 係を決定する。 <ul style="list-style-type: none"> ・一つの係に2、3人とし、多い場合は分ける。
本時の活動	<ul style="list-style-type: none"> ○ 活動計画を立てる。 <ul style="list-style-type: none"> ・学級目標の達成に向けた係活動のめあてを明確にする。 ・教師の支援を受けながら、創意工夫のある活動を考える。 ・一人一役とし、いつ、誰が、どんな活動をするのかを明確にする。
事後の活動	<ul style="list-style-type: none"> ○ 係活動を始める。 <ul style="list-style-type: none"> ・活動計画に従い、係タイムを中心に活動する。 ・週に一回、係の発表をする。 ○ 活動を振り返る。 <ul style="list-style-type: none"> ・自己評価、他者評価をする。 ・カードをもとに、一週間の活動計画を立てる。

2 研究授業等の実際

（1）事前の活動

学級目標と係活動のめあてを確認し、その後一週間、係見つけの期間を設けた。係を見つけた児童に係名とその係でやりたいことを書かせ、順次掲示していった。掲示された紙を見ながら新しく係を見つける児童もあり、一週間で50の係を見つけた。

見つけた係を、学級目標を達成するために必要な係であるか、内容が似ているものはないかを話し合い、最終的に13の係を決定した。

決定した係の中から自分が得意なことや好きなこと等よさが生かせる係を選択させ、所属を決定した。希望者が多い場合は、係を二つに分けた。

（2）本時の活動

係ごとに、工夫した係名を考えさせ、めあて、活動内容を話し合い、役割を決めさせた。役割決めについて、一人一人が活躍し認め合えるようにしていくために、一人一人の役割を明確にさせた。その

後、一週間の活動計画を立てさせた。教師は活動が創意工夫できるものとなるように、活動例を示したり、係ごとに助言したりした。話し合い終了後、活動計画書は学級の全員が見ることができるように、係コーナーに掲示した。

本時の活動終了後、組織作りに関する振り返りを係と個人で行った。13の係の中で二つの係が「これからどんな活動をしていくのか分かりましたか」の項目に否定的な回答をしていたため、活動内容と一人一人の役割の確認を教師と共に行った。

(3) 事後の活動

毎日、朝の会の時間に係の発表の時間を設定し、発表の順番を決め、活動計画や係からのお知らせ、練習してきたこと等を発表する場とした。また、帰りの会には係タイムを設定した。毎週木曜日の係タイムは一週間の活動を振り返る時間とした。児童に自分や係のよさを実感させるために、自己評価と他人評価を行い、活動に対する思いを「ありがとうカード」「お願ひカード」「よいところカード」で伝える時間とした。この振り返りを受け、金曜日に給食時間を係給食として、翌週の活動の計画を立てさせたり、係タイムで「お願ひカード」に対して「返事カード」を書いたりする時間とした。個人あてのカードは個人の係ファイルへ、係あてのカードは係ファイルへ綴じさせた。

V 研究授業等の分析と考察

1 学級目標達成のために自主的に活動したか

(1) 組織づくりの段階

自分たちで話し合って組織をつくるために、事前と本時の活動を行った。

学級のみんなが喜んでくれる今までにない活動にしようと話し合う係や、係の中でそれぞれの役割を決めて確認し合う係等、積極的に話し合う係が多かった。話しいでつくられた13の係と活動内容を表3に示す。

組織づくり終了後の振り返りでは、「自分の得意なことができる係を選びましたか」という質問に全員が肯定的な回答をしていた。「(今までより)係が楽しくなった。」といった係づくりに関する記述を11人の児童がしており、得意なことを生かせる係に所属することで、活動への意欲とつながったとものと考える。また、係ごとの振り返りでは、「クラスのみんなが仲良く楽しくなるような活動を考えましたか」「係の

みんなが自分の意見を言えましたか」という質問に13の全ての係が肯定的な回答をしており、話し合いが活発に行われたことが窺える。

事前で係活動を進んでしない理由を「楽しくない係だから。」と記述していた児童が、事後では「みんなに楽しんでもらいたいから進んでする。」と変容が見られた。

以上のことから、組織づくりの段階で児童は学級目標達成に向け、自主的に活動したと考える。特に、「今までの係活動と比べてよかったです」という問いに対して、組織づくりに関する自由記述が多いことから、学級目標を意識し、自分の得意なことを生かした係づくりをしたことは、児童が自主的に活動することに有効だったと考える。これは、得意なことを活かした係に所属することで、自信を持って活動ができたこと、また、自分の得意なことが学級の役に立つことから、自分たちで学級を楽しくしていくんだという意欲を一人一人の児童がもてたからではないかと考える。

表3 決定した係と活動内容

係名	活動内容
学校のみんな・先生 インタビュー新聞	・先生や友だちにインタビューして新聞を書く。
かん字何でも	・漢字クイズを考えたり、きれいに漢字を書くコツを教えたりする。
色ぬりぬりタイム	・動物のぬり絵をかいてみんなにぬってもらう。
色キラキラ	・人のぬり絵をかいてみんなにぬってもらう。
スポーツおまかせ	・ロング昼休憩にするスポーツとそのルールを考える。
絵本ラララ	・本の紹介や読み聞かせを行い、みんなが好きな本のランキングを作る。 ・みんなで歌う歌を考える。
生きものたくさん	・動物や虫、魚の特徴等をみんなに教える。
すいすいおよごう	・いろいろな泳ぎ方を教える。
こくばんけし	・黒板を消し、チョークの準備をする。 ・黒板にみんなへのメッセージを書いて帰る。
あいさつ・あけしめか ぎまど	・朝、教室の前であいさつをする。 ・戸締りをする。
けんこうやわらか ストレッチ	・みんなでするストレッチを考える。 ・けがや病気の人を保健室へ連れて行く。 ・給食の紹介をする。
ブラジル・えい語	・挨拶や言葉を英語やポルトガル語で教える。
楽しくあそぼう	・休憩時間にする遊びを考える。

(2) 運営の段階

学級内の仕事を分担処理し、自主的に活動するために事後の活動を行った。

発表に向け準備をしたり、活動の参考にアンケートをとったり、取材に行ったりと、計画に基づいて各係が活動を行っている姿や、お願いカードを積極的に書いたり、カードを楽しみに待ち、その内容に応えようと話し合いをする等、児童が自主的に活動する姿が見られるようになった。

また、活動を創意工夫することで、学級の友だちが楽しんでくれることに喜びを感じ、もっと係をよくしていこうという気持ちから、係の時間以外にも活動をする等、さらに自主的に活動する様子が見られた。

これらのことから、運営の段階で児童は学級目標達成に向け、自主的に活動したと考える。特に、アンケートの自由記述からも「お願いカード」や「返事カード」「ありがとうカード」で思いを伝え合う活動が有効であったことが分かる。児童は活動に対する希望を「お願いカード」で伝えられることで、自分たちの係は必要とされていると感じ、希望を取り入れようと話し合い、創意工夫しながら活動へと生かしていった。「返事カード」を受け取った児童は、自分の考えを受け入れてもらった、自分の考えが係活動に活かされ、学級のためになったという気持ちを持つことができ、「ありがとうカード」を受け取った係は、やってよかったという気持ちになっていた。

(3) アンケートの回答と教師の観察から

係活動についてのアンケートの「係活動を進んでやっていますか」「係活動をよくしていくために係の友だちと話し合っていますか」の2項目の回答を確認するとともに、日々自主的に活動しているかどうかを教師が観察することにより、係活動が活性化している児童を捉え、事前と事後で比較した。図1のグラフに示したように、係活動を活性化させたと考えられる児童の人数が、事後では増加している。

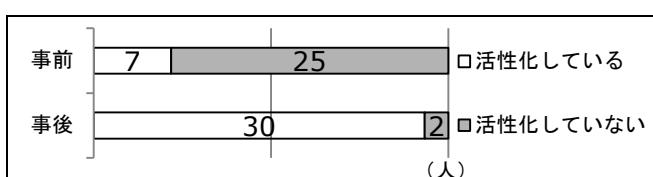


図1 係活動を活性化している児童の人数の割合

児童が係活動をがんばろうと思った理由を表4にまとめた。表4から、係づくりや係タイム、カードに着目している児童の多いことが分かる。

表4 係活動をがんばろうと思った理由（複数回答あり）

	手立て (人数)	児童の記述
環境 教室	係コーナー (3)	・係コーナーで書くのが楽しいです。 ・係コーナーがあるから楽しいです。
づくり 組織	係づくり (11)	・2学期の係より楽しくなったから。 ・みんなで話し合って作った係だから。 ・もっといい係になっているから。
運 営	係タイム (7)	・係タイムがでて「やるぞ。」というやる気が出るから。 ・係タイムで話して、やって楽しい。 ・もっと係をよくしたいから。
	係給食 (5)	・係給食で話合いができたから。 ・係給食の時に発表して楽しかった。
	係発表 (4)	・得意なことをみんなに発表できるから。 ・発表が近くなってきたら、がんばろうという気持ちになる。 ・みんなを楽しませたいから。
	カード (11)	・カードを書かなきやみんな楽しくもないし、面白くないからです。 ・お願いカードに「こつを教えてください。」と書いてあったから。

2 係活動の活性化によって、仲良く助け合いながらよさを伝え合い、互いのよさを認め合おうとする児童は育ったか

(1) よさを伝え合い、互いのよさを認め合おうとする児童は育ったか

振り返りカードでは、「友だちと仲良く助け合って活動をしましたか」という質問に、「よくできた」または「できた」と2回とも回答をしている児童は32人中30人であった。係活動をする中で、仲良く助け合っていると実感した児童が多かったと言える。

事前と事後に行ったアンケートの4項目において、各項目に「はい」と回答した児童の人数を表5に示す。4項目のうち、特に係活動においてよいところを見つけて伝えたり、伝えてもらったりする項目で大きく増加した。自由記述から、運営の段階で行った係での話合いや、カードのやり取りを通して、よいところを見つけて伝えたり、伝えてもらったりしたと感じている児童が増えていることが分かる。

表5 「はい」と回答した児童の人数比較

質問内容	事前 (人)	事後 (人)
あなたは、係活動をしている友だちのよいところを見つけて、それを伝えていますか。	6	32
あなたは、係活動のことで友だちからよいところを見つけてもらい、それを伝えていますか。	3	31
あなたは、友だちが大切だと思いますか。	32	32
あなたは、友だちから大切にされていると思いますか。	22	31

「友だちが大切だと思いますか」の項目では、「はい」と回答した児童の増減はなかったが、理由として記述した内容に変化があった。事前と事後のアンケートの記述内容を分類したものを表6に示した。

表6 友だちが大切だと思う時の記述内容の事前事後比較

	事前 (32人)	事後 (32人)
遊びに関すること	20	7
接し方に関すること	12	6
係活動に関すること	0	19

事前のアンケートでは、一緒に遊ぶ時に友だちが大切だと感じている児童が最も多かった。事後の記述では、「係の仕事が一緒にできた時。」「係の人が相談してくれる時。」「係で話し合った時に『いいね。』って言ってくれるから。」「(自分が計画した遊びで)みんな遊んでいる時に喜んでいるから。」といった係活動に関する記述が19人と最も多くなり、係活動を通して自分が認められたり、大切にされたりしていると実感し、友だちを大切だと感じている記述が増えた。

「友だちから大切にされていると思いますか」の項目において事前と事後のアンケートの記述内容を分類したものを表7に示す。

表7 友だちから大切にされていると思う時の記述内容の事前事後比較

	事前 (22人)	事後 (31人)
遊びに関すること	10	5
接し方に関すること	12	10
係活動に関すること	0	16

肯定的な回答をしていた児童の記述を事前と事後で比較してみると、事前の記述で最も多かった「『一緒に遊ぼう。』と声をかけてもらう時。」に代わり、「係の仕事を手伝ってもらった。」といった支援、「カードでいいことを書いてもらっている。」といった賞賛、「『ありがとう。』と言われた時。」といった感謝、「困った時に一緒に考えてくれた。」といった相談など、大切にされていると感じる理由に広がりが見られるようになった。これは、小集団での係活動を通して様々な体験をさせてることで、友だちとのかかわり合いが増え、自分は大切にされていると実感するとともに、友だちのよさを認めるようになったと考える。一方で、表6と表7共に係活動に関する記述が事前には見られなかったのは、友だちが大切だと感じたり、大切にされていると感じるような係活動には至ってなかったと考える。

(2) 係活動の活性化が、仲良く助け合いながらよさを伝え合い、互いのよさを認め合おうとする児童の育成につながったか

学級目標達成に向け、自主的に係活動することが、仲良く助け合いながらよさを伝え合い、互いのよさを認め合おうとする児童の育成につながったのかを検証するため、自主的に係活動をした児童を前頁図1より、よさを認め合おうとする児童を全頁表5の4項目全てに「はい」と回答した児童、及び教師の観察より捉え、次のように整理した。

- | |
|--|
| A : 学級目標達成に向け、自主的に係活動をし、仲良く助け合いながらよさを伝え合い、互いのよさを認め合おうとする児童 |
| B : 学級目標達成に向け、自主的に係活動をしておらず、仲良く助け合いながらよさを伝え合い、互いのよさを認め合おうとする児童 |
| C : 学級目標達成に向け、自主的に係活動をしていないが、仲良く助け合いながらよさを伝え合い、互いのよさを認め合おうとしていない児童 |
| D : 学級目標達成に向け、自主的に係活動をしておらず、仲良く助け合いながらよさを伝え合い、互いのよさを認め合おうとしていない児童 |

A, B, C, Dの定義

表8 自主的に係活動をし自他のよさを認め合おうとする児童の事前事後比較

		事後				合計
		A	B	C	D	
事前	A	1				1
	B	5	1			6
	C	1				1
	D	21	1	2		24
	合計	28	2	2	0	32

自主的に係活動をし、自他のよさを認め合おうとする児童の事前と事後の比較を表8に示す。

事前ではDの人数が24人と最も多かったが、事後ではAの人数が28人と最も多くなった。

CからA、DからAへと変容した児童の「係活動のことで友だちからよいところを見つけてもらい、それを伝えもらっていますか」の項目の記述を見てみると、「『発表の仕方がよかったです。』」というカードをもらった。」「『犬をポルトガル語で教えたからがとうカードをもらいました。』」といった、カードを通して気持ちを伝えているものと、「『それ、いいね。』」と言った。」「『意見をたくさん言っていたね。』」と言わされた。」等、話合いや活動をしている時に、よいとこ

ろを直接伝えられているものがあった。

これは、友だちのよさや大切さを認める機会を日常的な活動である係活動の中に意図的・計画的に仕組むことにより、認め合いが係活動のいろいろな場面に広がってきたからだと考える。

これらのことから、学級目標達成に向け、自主的に係活動をすることは、仲良く助け合いながら互いのよさを認め合おうとする児童の育成につながることが分かる。

(3) 変容があまり見られなかった児童

4人の児童は学級目標達成に向け、自主的に係活動をしたり、仲良く助け合いながら互いのよさを認め合おうとするまでに高まらなかつた。

そのうち2人は、学級目標達成に向け、自主的に係活動をしているが、仲良く助け合いながらよさを伝え合い、互いのよさを認め合おうとしている児童である。記述を見てみると「いいところを言われたことを覚えてない。」「友だちにいじわるされたりするから（大切にされているとは思わない）。」と書いている。このことから、よいところの伝え方をさらに工夫したり、「一緒に活動してよかったです。」と感じられるような活動の場を増やしたりする必要があると考える。

また、学級目標達成に向け、自主的に係活動をしておらず、仲良く助け合いながらよさを伝え合い、互いのよさを認め合おうとしている児童の2人は「休んでいて係活動ができなかつたから。」「係活動を忘れそうになるから。」と自分が活動できなかつたことや、進んで活動していなかつたことを理由として記述している。このことから、係活動を活性化できなかつたと児童が感じたのは、活動時間が2人にとって十分ではなかつたのではないかと考える。

VI 研究の成果と今後の課題

1 研究の成果

係活動において、学級目標達成のために自主的に活動させる工夫をすれば、仲良く助け合いながら互いのよさを認め合おうとする児童の育成につながることが明らかになった。特に、係での話合いや、活動に対する思いを伝え合う場面を意図的・計画的に取り入れることが効果的であることが分かった。

2 今後の課題

係活動においては、仲良く助け合いながら互いのよさを認め合おうとする児童の育成に至つたが、日

常生活においては、まだ至っていない。今後は、係活動で有効であった手立てを他の活動でも意図的に取り入れていく必要がある。

【注】

- (1) 表1に示す発達の段階に即した係活動を活性化するための工夫については、文部科学省(平成20年b) :『小学校学習指導要領解説特別活動編』東洋館出版社 p. 55, 京都市総合教育センター(平成23年) :『自主的・実践的な態度を育てる係活動を活発にするために』, 大庭正美(2011) :『当番活動・係活動指導の急所 子どもがハマる手立て』明治図書, 稲垣孝章・吉沢猛(2012) :『係活動 早わかり』小学館を基に稿者が作成。

【引用文献】

- 1) 文部科学省 (平成20年 a) :『小学校学習指導要領』東京書籍 p. 112
- 2) 文部科学省 (平成20年 b) :『小学校学習指導要領解説特別活動編』東洋館出版社 p. 32
- 3) 文部科学省 (平成20年 b) :前掲書 p. 32
- 4) 長沼豊 (2010) :『新訂 キーワードで拓く新しい特別活動』東洋館出版社 p. 36
- 5) 肥沼志帆 (平成24年) :「豊かな人間関係を育むために」『初等教育資料』9月号 東洋館出版社 p. 52
- 6) 文部科学省 (平成20年 b) :前掲書 p. 49
- 7) 占部美緒子 (2011) :大庭正美編『当番活動・係活動指導の急所 子どもがハマる手立て』明治図書 p. 30
- 8) 杉田洋 (2012) :「一年間を通してした学級生活づくり」『道徳と特別活動』7月号 文溪堂 p. 35
- 9) 中尾佳子 (2011) :大庭正美編『当番活動・係活動指導の急所 子供がハマる手立て』明治図書 p. 92
- 10) 北村文夫 (2011) :『指導法 特別活動』玉川大学出版部 p. 55
- 11) 文部科学省 (平成20年 b) :前掲書 p. 55

【参考文献】

- 杉田洋 (平成18年) :「子どもたちのよさを生かす特別活動の創造的展開」『初等教育資料』2月号 東洋館出版社
相原次男・新富康央・南本長穂編著 (2010) :『新しい時代の特別活動 個が生きる集団活動を創造する』ミネルヴァ書房
大庭正美編 (2011) :『当番活動・係活動指導の急所 子どもがハマる手立て』明治図書
京都市総合教育センター (平成23年度) :『自主的・実践的な態度を育てる係活動を活発にするために』
稻垣孝章・吉沢猛 (2012) :『係活動 早わかり』小学館